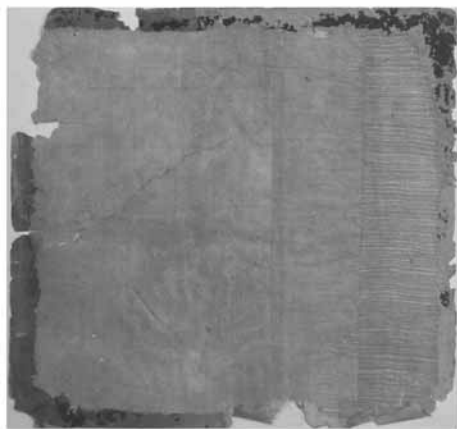


唐山蒼蒼

唐水湯湯

帝德日正日白

図②旧表紙



図④元唐帝廟碑(北京文物局所蔵本)



図①4種比較

D 唐帝廟碑 C 蔡襄 B 柳公権 A 顔真卿



図③明代の文書等



「落ち穂拾い記」
『唐帝廟碑』
⑥9

唐帝廟碑を書いた劉廣(1248〜1328)の書は、唐の顔真卿の書風が、脈々と受け継がれていることを示している。唐の柳公権、宋の蔡襄と時代順に4種の書の一部を並べてみた(図①)。元という異民族が支配しても、政治体制の内部には、伝統文化が強く残されていたのであろう。この拓帖であるが、開くと左右で80 cmほどになり、非常に豪華である。この文字の大きさの剪装拓本では、余り目にしたことがない。表紙は、青色の染め紙で、本文と同じほどの厚さで、端がすり切れ破れていた(図②)。そのために厚紙に布地を巻いて表紙に作り替えた。その時に取り替えた古い表紙の裏側に文字らしきものが書かれていた。古そうな拓帖の表紙であり、気になり水を含ませ、ばらばらにした。何枚もの薄い紙が貼られていた。丁寧に剥がしていると筆で書かれた文字や、古い木版本の一部、驚いたのは官印が捺され、萬曆24年(1596)七月の日時を記したもので、大小十数枚ほどになった。表紙の裏紙に利用されたのは、当時の不要になった政府の文書である(図③)。この拓本が作られたのは明代の後、清代の初めと想像される。装本の大きさと、表紙の中に用いられた用紙などから、少なくとも清朝前期に当時の政府の内部で制作された拓帖であると推測した。本文の文字も清初や明代の拓調の風格を具えていると。今回、この碑を取り上げてから、あれこれ中国側のネットの中に、北京の文物局所蔵の善本拓本を整理した報告があり、『唐帝廟碑』の善本が収蔵されている記事を見つけた。先月末にその報告書を購入した。北京文物局所蔵『善本碑帖録』の34種の碑帖の中に、『元唐帝廟碑』として、清朝後期の金石名家・張廷齋旧蔵本が、鮮明な図版入りで紹介されていた(図④)。その拓の最終所蔵者・邵章(1872〜1953民国時代の金石家・蔵書家)が、跋文の中でこの帖は「孤本」ではないだろうかと記している。ほとんど見たことがないのであろう。

伊藤滋(書齋名・木鶏室)

書のひろば

理事長 下谷 洋子

第76回毎日書道展 関西展開催

8月13日から17日まで、毎日書道展の巡回展の一つ、関西展が京セラドーム他で開催されました。

今年は、私が本展の実行委員長を務めた関係で、関西展の企画に「かな」を取り入れ、かな書道作家協会との連携により、かな作家(松井玉箏・吉田久実子・鷹野理芳先生と私)で揮毫、ワークショップなどを行いました。私は担



関西展祝賀会にて芸術院関係者

当理事としてかなに関しての講演も行った関西展はかな一色になりましたが、かなの少ない関西のため、大変好評だったようです。

17日にはホテルグランヴィア京都で540余人の大祝賀会が開かれ、本院は関西の会員が多いため、大いに盛り上がりしました。

書道芸術院秋季展 出品者の作品確認・公募審査他

10月の秋季展は、8月6日に公財役員を含む出品作家115人の作品確認を行いました。

その後平行して毎日アートサロンにて開催される前衛書展出品者の作品確認も行われました。

続いて同月21日に、理事長・常務理事他1名の審査員により審査会員候補の公募作品の審査を行い、「秋季菊花賞」7名、「俊英賞」25名を決定しました。5部門の応募者数は昨年とほぼ同数の計169点でした。

今年は、10月11日に昨年同様紙パルプ会館3階会議室にて表彰式と前衛作家展の大作出品者を中心に研究会を行い、終了後コートヤード・マリオット

銀座東武ホテルにて懇親会を予定しています。入賞者は下記の通りです。

・秋季菊花賞(7名)

漢字	伊藤 明秋	宮崎 春泉
かな	逸見 玲子	
現詩	小野寺礼華	藤井 花香
前衛	相内 沙莉	和田 敬子

・秋季俊英賞(25名)

漢字	阿部 雅悠	荻田 良風
	金澤 峰雪	川渕 吏子
	佐茂 明祥	渋谷 蛭江
	古川 彩遥	三浦 小樹
かな	井上 智美	
現詩	上野 千琇	佐久間玉瑛
	佐藤 俊光	下津 舟楓
	高橋 真弓	芳賀 真桜
	日高 右真	舟寶 恵美
前衛	山崎 紫心	
	赤羽根えり奈	遠藤 和香
	佐々木藍水	高瀬 享美
	鶴淵 亜希	藤崎 松月
	御園生芳瑤	

第59回書道芸術院単位認定講習会 ホテルポートプラザちばにて開催

8月23日、24日と、2日間にわたり、本院の第59回単位認定講習会が開催さ

れました。

昨年は岡山と東京でそれぞれ日帰りの講習会を行いました。今回は従来の1泊2日で全部門を学ぶ講習会のスタイルになりました。

漢字・かな・現代詩文書・篆刻・前衛の5部門に原拓書道史・一般教養も入り、出品者の懇親会も加わって、久しぶりに充実感のある講習会となりました。

受講者は、7割ほどが千葉の会員でしたが、遠く青森や秋田、鳥取・大阪・高知などからも参加があり、比較的若い人が多かったように思います。

南関東総局の先生方には大変お世話になりました。ありがとうございました。お世話をして下さった先生方も、ぜひ分世代が若返ったようでした。詳細は、次号にてノ



鳥取からの受講者に単位認定証が渡される

漢字書基礎基本講座 (16)

種谷萬城

篆刻・刻字基礎基本講座 (16)

後藤大峰

曹全碑拓本 冒頭部分



曹全碑拓本『承志存亡之敬』



曹全碑 臨書『承志存亡之敬』



曹全碑 隸書の基本点画



曹全碑 倣書『流麗典雅』



隸書1 曹全碑

隸書は秦代に誕生し、漢代に正式な書体として広く流通した。篆書を簡略化し、曲線的なところを直線化し、容易に速く書ける文字として作り上げられた書体。戦国時代の秦国で書かれた竹簡や、後漢中期までの石刻等では波磔を際立たせない古朴な隸書・古隸が見られる。前漢時代の木簡や後漢時代の末に流行した石碑に見られる隸書は、用筆法が洗練され、装飾的になり、殊に波磔が強調されてくる。波磔のある隸書を八分と呼ぶ。波磔には表情が盛り込まれ、多彩な書風が登場する。

隸書を書くにあたっては、①起筆で筆先を巻き込み蔵鋒・中鋒の用筆をする。②横画は水平、縦画は垂直。③右肩の転折部は『釘打ち構造』(筆を一度引き抜き、入れ直す)。④横広の字形。⑤等分割、構造的には均斉様式が主体。⑥八分隸は装飾的な波磔が中心の構造で一字一波。⑦筆順は比較的自由。

曹全碑は後漢時代末の中平二年(185年)の刻碑。直後に地中に埋められ、明時代末に出土した際には、損傷が少なく、完全な状態であった。現在は西安碑林博物館に碑石は安置されている。波磔が優雅で流麗典雅な趣の書は後漢を代表する名碑。

※YouTube『筆のサロン』に臨書と倣書の関連動画を配信しました。是非参考にして下さい。QRコードでアクセスできます。



基礎基本講座

今回は彩色について、お話を進めて行きたいと思います。

刻字作品を創るのに彩色を施す、これは作品を創るのに刻字独特のものです。

一時代以前は主に日本画用の岩絵の具が一般的、それに膠を混ぜて塗布していたようです。

今は主に、水性顔料着色剤、油性の着色剤などを主に使用致しております。

それに墨液、朱墨液なども使用致しております。

最初にお話し致しました、岩絵の具とともに、よく使用致しますのが「胡粉」です。

乳白色で品のある仕上がりになります。

これは、貝殻を焼いたり、乾燥したりして創ります。

現代の刻字作品は今、ご紹介したもののが使用されております。

どの着色剤を使用するかは、作品の仕上がり、作者の作品に対する意図などで決定して良いと思います。

それと最も重要なアイテムとして、金箔や銀箔の箔類です。

主に陽刻(浮き彫り)の文字部分に使用します。

刻字作品のよく見られる代表的なものです。

彩色には以上のようなものがあります。

要は作者の作品に対する思いと仕上がりを考えて進めて行けば良いのではないのでしょうか。

刻字作品は刃物による彫りと、仕上げの彩色で出来上がっております。どちらも作品創りの重要な工程です。

書道芸術院

令和の群像 (2025)



平野 笛舟 (千葉)

私の歩んできた道

私が古典と出会ったのは中学生の時でした。中学時代はブラスバンド部に所属していたのでお稽古にあまり通うことができませんでした。そんな私に当時ご指導下さっていた遠藤笙史先生が一冊の法帖を貸して下さいました。それは「蘭亭叙」でした。それまでは競書の課題くらいしか書いたことがなく、もちろん、臨書という言葉も知らず、以来その魅力にとりつかれ、ただただ楽しく書いていました。

高校時代、書道は2年生時だけ授業がありました。書道担当の大村光堂先生に、私の字は弱く芯がないことを指摘され、以来

強さを意識して書くようにしました。

お稽古には学校帰りに行くことができ、遠藤先生は高野切や近代詩をいろいろな筆を使って書いたりすることを教えて下さいました。私の今の書の基になっていると思います。

大学は、高3の担任の勧めで大東文化大学で書を学ぶ道を選びました。入学と同時に遠藤先生のご紹介で種谷扇舟先生に入門させて頂いた。沢山の書・歴史・墨や筆そして礼儀等々教えていただきました。

大学ではいろいろなジャンルの書を書かれるご立派な先生の授業を受け、私には新鮮で、直接ご指導いただけると大きな喜びでした。寮生活でしたが、授業で書いて部活で書いて寮に戻って書いて、あの頃が一番書いていたと思います。書道部の先

輩や同期生は高校時代までにいろいろな勉強して実績を残してきた人が多く、何もしてこなかった私はかなりのカルチャーショックを受けました。そんな中で「独立」の先輩が墨をドロドロになるまで磨って長鋒の筆にたっぷりつけて枯樹賦を書いておられました。とてもおもしろい線が出るのです。私も真似して濃墨で臨書をするようにしていました。また、針切を見事に臨書する同期生がいて、同時に優雅で繊細かつ美しいかなにも魅力を感じるようになりました。

そして、扇舟先生のお稽古では独自のカリキュラムに添って古典を臨書・倣書し、合格すると半紙に合格証を書いて下さいました。また、扇舟先生は一人一人の個性を見つけて伸ばして下さいさるすばらしい師匠でした。私にはかなに力を入れてご指導下さいました。そして当時「一案」の池内立明先生に通信でご指導頂くことをお許し下さり、応援し育てて下さったことに感謝しています。

30代は体調不良で10年ほど休会し、復帰後は萬城先生のご指導の下、沢山の先生・先輩方にご指導いただき深く感謝しております。あまり真面目な

第78回書道芸術院展「袁宏道」



平野 笛舟 書

弟子ではありませんし、何もかも中途半端で一つとして得意といえる書がありません。臨書を作品に生かせるよう筆を持てる限り精進してまいりますので、今後ともご指導宜しくお願い申し上げます。

書道芸術院

令和の群像 (2025)

「到」



横井正江書

中国殷周

「明日に一步」
私が筆を持つきっかけになったのは友達の「書いてみない」の一言で、それが小林白萩先生との出会いにつながりました。深い考えもなく軽い気持ちで筆を持ち、その時私はすでに33歳でした。何もすることがないという安易な気持ちで筆を持ち、すぐに書の道が自分にはない空気感や厳しさ、基礎的知識など何もない自分に気付かされうんざりしていました。その頃長きに渡りお世話になった白萩先生のもとを離れ、一人で生徒を抱え試行錯誤の日々でした。そんな折、故・恩地春洋先生が臨書の講座へと導いて下さいました。徹底的に古典をご指導して戴き、基本とは何かから始まり、その古典臨書の成り立ちや運筆まで細かくご指導していただき講座が徐々に楽しく、その日が待ちどおしくなりました。

時代には感謝しかありません。明日に一步との精神で頑張りたいと思っております。



横井正江(大阪)

時代には作られた青銅器に鑄込まれた金文、古代から中世にかけて使用された細長く平らに削った木に文字を書いた木簡、秦の時代に実用性を重視した隷書などなど、私には新鮮で美しく、一つ一つが発見で筆を持つよろこびを感じさせてくれました。

そして大字書(一字書)。
この書との出会いは私には大変大きく奇妙な感覚や感動、魅力的で未知の書で世界観や考え方で変わったと言っても過言ではありません。紙、筆、墨、変化する墨色の妙味など私には魔法や手品、の世界でした。

臨書なしでは語れないこの書(大字書)は生涯私の一つの大きな挑戦の書となりました。故・恩地先生からは「大字書の基本は線にあり、線の強さは基本中の基本やで、しっかりと生徒に伝授していきなさい。」と教わりました。やさしい口調ですが、きびしい言葉は忘れません。

今は春洋会の会長、小林琴水先生の元で、会の一員とさせて頂き、書にも流行があり、次々と新しい形式や動き、まとめかたなど、琴水先生にキメ細かくご指導して頂きなんとか頑張っております。

喜寿を迎え、昭和、平成、令和と世代を通して筆を持ち、この令和の年に自分ができることは模索しつつ、ちがう自分が表現できるような日々学び進みたいと思っております。これまで見守りご指導下さいました先生方には感謝しかありません。

明日に一步との精神で頑張りたいと思っております。

書道芸術院

令和の群像 (2025)



阿部 恵泉 (千葉)

「あこがれは…」

私が23才の時のことです。義兄の勤務先（ブラジル・サンパウロ）にいる家族のサボートをするため渡航を決めました。大使館でビザを取り、船便で衣類等を送って渡航の準備をしていました。ところが、思いがけず体調を崩してしまい、やむなく渡航を断念しました。

その後、会社の上司に誘われて書を習うことになりました。8年ほど経って実家で書道教室を開設。生徒は順調に増え、色々

な書道展に出品するようになりました。しかし、次第に自分の指導力不足を感じるようになり、知人のアドバイスで、平成3年の暮れに辻元大雲先生に入門をお願いしました。

翌年から先生のご自宅でお稽古が始まりました。私の好きな「雁塔聖教序」の臨書をお見せした時に「線が太い」と指摘されショックでした。そして先生は半紙に『欧・虞・褚・顔・鄭』の横画・縦画・点・転折・はらいを書いてその特徴と違いを解説してくださいました。その資料は今も私の教室で活用しております。

辻元大雲先生主催の古典研究『雲の会』



第67回毎日書道展「降り注ぐ…」日守菜穂子句

阿部 恵泉 書

には20年在籍して幅広く古典を学びました。月1回テーマの臨書作品（半切）を持ち寄り互評し合い、当番はそのテーマについてレポートを作成して発表します。私が担当した『顔真卿の楷書について』は、辻元先生に「これは高校の授業で使えるよ」と言っていた感激したことを覚えています。

古典は筆者の身分やその時代の社会情勢・書風などを知ることができて面白く、様々な筆法もすべて作品制作に生かすことができます。私の臨書はいつも「真面目だな」と先生に指摘されてしまいます。古典を基にもっと自分の呼吸で生きた線が表現できれば作品の幅も広がると思うのですが、研究不足を反省するばかりです。

「あこがれは夢の始まり」これは書家・宮本博志先生の詩です。この詩は私の書制作の『原動力』と言えます。

辻元先生のお字形・あの渴筆等々、いつか私も書けるようになればたらと夢中で追い続けて30年が経ちました。先生には御多忙極まる中でのご指導とご厚情をいただき、また、芸術院の諸先生や書友の皆さんのお陰でここまで成長することができ感謝の念が尽きません。

近年、病を得て書から離れたと思うこともありました。幸いにも私の教室から巣立った人達が夢に向かって目覚ましい活躍をするようになり、それが私の励みにもなっています。あこがれの先生方の作品を拝見しては再び制作意欲がわき、筆をもつことができるうちは少し頑張ってみようか……と思う昨今です。



中里 智香
(群馬)

「秋風に」

この度は審査会員にご推挙頂きありがとうございます。下谷洋子先生をはじめ、勝山初美先生や書泉会の皆様のお陰であり、心から感謝申し上げます。作品は新古今集から秋の歌を選びました。書の奥深さを感じながら、これからも精進してまいりたいと思います。

(智香)



工藤 史音
(青森)

「Oschon」

この度は、審査会員にご推挙頂き誠にありがとうございます。工藤永翠先生のご指導をいただき、先輩方とよき書仲間のおかげと心から感謝致します。書の趣深さと海外にも通じるアート性を大切に、伝統の継承と発展、挑戦に繋がるよう今後とも精進して参りたいと思います。

(史音)

本年度の「新審査会員紹介」は本号で終了となります。

『書道芸術』クロニクル(1) 創刊号

書道芸術

書道芸術院

書壇のオビニオンリーダーたんとする気概が感じられる。他の書道団体との関わりの中で、本院がどのような立ち位置でどう振る舞うべきかという強い問題意識がうかがえる。

発行日 昭和32年(1957)12月1日
編集人 中島邑水 発行人 香川京(峰雲)
印刷所 吉田印刷株式会社
(東京都千代田区神田錦町)
総ページ B5版16ページ 表紙含む
価格 60円 送料8円
口絵写真 居延木簡・蓬萊切
手本揮毫 種谷扇舟・中島邑水
競書成績 高校の部：97名(1級510級)
一般の部：137名(優級510級)
競書短評 高校3名 一般6名 写真版あり
記事 ①発刊の辞

- ②この作品をとりあげる
- ③近代詩文書は第二芸術か
- ④古典の研究(一)：蓬萊切
- ⑤篆刻初歩講座(一)

【解説】

記事の①は香川峰雲による。この年の2月に幹部の間で発案されたが、諸般の事情で遅延が生じたため12月の創刊となった、とある。「一党一派に偏する」ことなく「他からの正しい批判に対しては、これを受け入れる」と明記されており、

この号に競書結果が載っているので、事前に作品を募集したものと思われる。それを審査して各級に振り分けたようだ。9枚の写真版は「吾心在太古」「小波月光」のほかに前衛的なものが2点、近代詩文書が1点ある。高校と一般を分けたのはこの号だけで、次号からは高校生も一般扱いとなる。②では一般の1級の方の作品が選ばれ、1ページを使って5人の幹部が会話形式で批評を述べてゆく。褒めるコメント1割、問題点の指摘が9割。全く逆の意見も出され、1枚の半紙作品を真ん中にして議論が白熱していく様子が目に浮かぶ。それだけ後進の指導に真剣に取り組んでいたのだろう。

③は夏の毎日展の第四部(近代詩文作品)で、規定に「一般社会の人々にも読みやすいようにすること」とあるにもかかわらず、上位入賞作は非常に読みにくい作品だったことに對する批判的な内容。審査と規定との矛盾を鋭く突いたのは武士桑風。創刊号から初心者向けに連載講座が用意されたが、内容はかなり高度。④は千代倉校舟、⑤は伊東快堂が担当。表紙は一面が深紅のインパクトのある装丁で、29号まで続く。(文中、敬称略) ※57ページに資料を掲載



特集 第76回 毎日書道展

国立新美術館 7月9日(水)～8月3日(日)
東京都美術館 7月18日(金)～7月24日(木)

第76回毎日書道展総評

下谷 洋子

第76回毎日書道展の東京展は、昨年同様、搬入から鑑別・入賞審査、表彰式と滞りなく行われた。

公募の出品点数は各部門とも微減であった。展示については、新しく北陸展が東京展に移管されたため、会員及び入選作品は東京都美術館に展示となり、それに伴って従来の国際高校生選抜書展の全入賞作品は国立新美術館会場に展示されることとなった。

全出品者を対象とする文部科学大臣賞は、大字書部の山中翠谷先生が受賞した。本院の会員賞は、前衛書部の高原梨秀氏1名であった。

(その他毎日賞以下は別途記載)

東京展のイベントは、従来通りの会員賞受賞者による席上揮毫会、毎日賞受賞者作品解説会の他、新たに毎日書道会理事・監事によるギャラリートークが加わった。

7月9日 下谷洋子、室井玄鸞
7月16日 赤平泰処、松井玉筆
7月23日 柳 碧蘚、山中翠谷
7月30日 永盛蒼穹、北野攝山
(以上国立新美術館)
7月23日 中原志軒、宮本博志
(東京都美術館)



漢字部の毎日賞作品解説会

他に、毎日書道図書館連携企画として「拓本をとってみよう」も企画され、これは本院の金木和子氏が指揮を執った。

での開催となった。

東京展以降は、全国8会場にて地方展が開催される。

- ・ 関西展 8月13日～17日 京都市セラ美術館他
 - ・ 東海展 8月19日～24日 愛知県美術館ギャラリー
 - ・ 中国展 8月19日～24日 広島県立美術館
 - ・ 四国展 8月20日～24日 愛媛県美術館
 - ・ 東北仙臺 9月19日～24日 せんだいメディアテーク
 - ・ 北海道展 9月24日～28日 札幌市民ギャラリー他
 - ・ 北山形展 10月15日～19日 山形美術館
 - ・ 九州展 10月28日～11月2日 大分県立美術館
- 各地方の会員の皆様のご協力をお願いします。

なお、毎日展の審査会員以上(今年は西暦偶数年生まれ)を対象に76回展

の出品作によって来春の「現代の書新春展」のセントラルミュージアム銀座会場の出品者が選定された。
会期1月4日～9日
(本院関係)

セイコーハウス銀座ホール展(役員の

み)
辻元大雲、下谷洋子、小竹石雲
セントラル会場100人展
半田藤扇、名越蒼竹、京 絹子、
川島丹錦、小林琴水、畑中弄石、
真下京子の各氏



テーブルカットで華やかに開幕



前衛書部 高 原 梨 秀



高 原 梨 秀
(前衛書部)

この度は第76回毎日書道展におきまして会員賞を賜り、心より御礼申し上げます。

7歳から始めた書道の「お稽古」から今日まで途切れることなく続けてこられたのは、工藤永翠先生に出会えたお陰とおっしゃっております。そして書道芸術院の先生方、千葉蒼玄先生、宮城野書人会、玄穹社と永翠社、多くの皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

今回の作品「rhythm」は、書に向かう自身の心の音を表現しました。初めて前衛書に触れた10代の頃の夢中に筆を走らせていた心躍る気持ち、20代、30代にかけての苦悩や葛藤、そして今後の書に対する姿勢をイメージしました。これからも古典の臨書を怠らず、作品制作に力を入れてまいりたいと思います。ありがとうございます。

第76回展書道芸術院出品数（公募・会友）

書道芸術院	漢字		かな		近代 詩文書	大字書	篆刻	刻字	前衛書	合計
	I	II	I	II						
本年度	172	185	117	129	398	164	0	17	324	1,506
75回展	167	190	102	131	387	171	0	24	337	1,509
増減	5	-5	15	-2	11	-7	0	-7	-13	-3

第76回展書道芸術院受賞者数

賞名	漢字		かな		近代 詩文書	大字書	篆刻	刻字	前衛書	合計
	I	II	I	II						
会 員 賞									1	1
毎 日 賞	0	2	0	2	2	2			2	10
秀 作 賞	3	3	0	3	7	3			4	23
佳 作 賞	7	3	3	3	10	5			13	44
U23毎日賞				1						1
U23新鋭賞						1				1
U23奨励賞		1		1	1				2	5
合 計	10	9	3	10	20	11			22	85

毎日賞



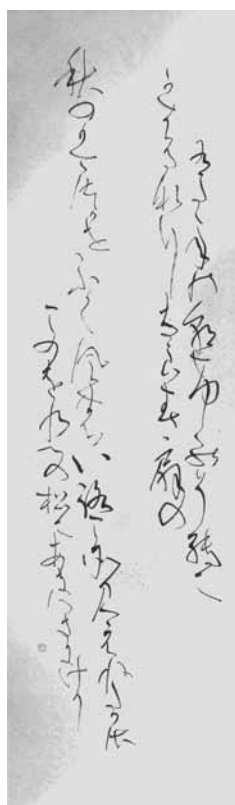
漢字部Ⅱ類 富原扇水



漢字部Ⅱ類 本郷谷恵



かな部Ⅱ類 大崎友里絵



かな部Ⅱ類 早部朗



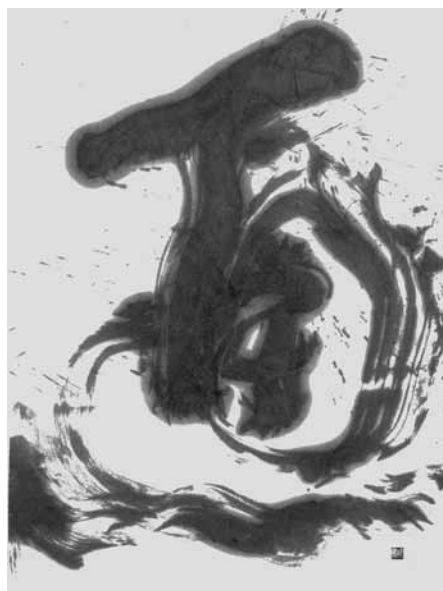
近代詩文書部 大友四峰



近代詩文書部 氏家久光



大字書部 衣田琴草

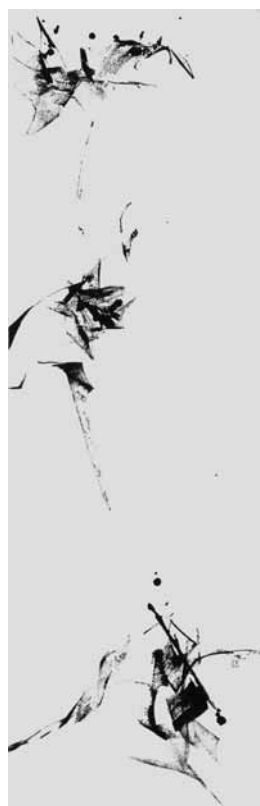


大字書部 木下玲窓

毎日賞



前衛書部
蛭川 友香里



前衛書部
田村 紅沙

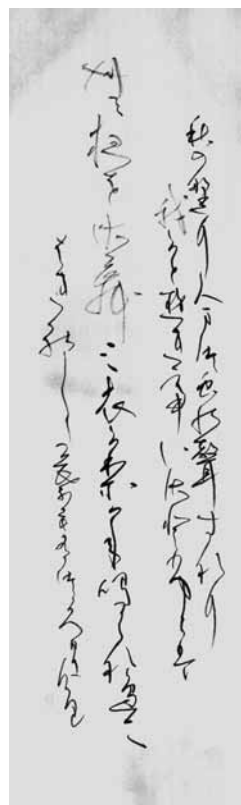


毎日書道展会員賞（副賞）
硯屏「起筆の一筆」（宮瀬富之 作）



毎日賞（副賞）
筆筒「起筆の一跡」
（宮瀬富之 監修）

U 23 毎日賞



かな部Ⅱ類
都丸花風

秀作賞受賞者

・漢字部（Ⅰ類）

安藤麗華 清水蘭舟 山崎皐月

・漢字部（Ⅱ類）

小木曾泰香 紺野遊山 河合鈴逕

・かな部（Ⅱ類）

加藤万丈 清水由紀子 菅原澗花

・近代詩文書部

石崎甘雨 大里蘭心 甲谷鳳梨
坂本蓉花 佐々木香桜 笹木蒼風
三浦淡虹

・大字書部

垣本敏尚 掛水美翠 金延憲市

・前衛書部

安藤楊風 鶴淵亜希 中塩朱華
長谷川明珠

佳作賞受賞者

・漢字部（Ⅰ類）

浅野黄扇 生田珠翠 諫山明美
小松賢龍 田中一葉 三浦小樹
望月考鳴

・漢字部（Ⅱ類）

大江竜之介 種谷悠輝 堀田白扇

・かな部（Ⅰ類）

井上智美 境野和子 矢口登江

・かな部（Ⅱ類）

木村関泉 小林溪姫 田中耶衣

・近代詩文書部

相澤正華 小野寺京紡 栗原由紀
佐々木藍水 佐藤俊光 須藤雪蓮
貫名桂峰 菱沼範子 山内桂峰
若林泰石

・大字書部

麻岡 優 岡本通子 柄山明珠
河岡北秀 清遠 瑞

・前衛書部

阿部邑里 荒谷明美 安藤京子
大町菜園 上林昌子 亀井美智子
佐藤葵心 花里智子 福田玉翠
本多東岳 松原美佐子 御園生芳瑤
道塚紫音

U23新鋭賞

・大字書部

梶原有未

U23奨励賞

・漢字部（Ⅱ類） 玉潤晴人

・かな部（Ⅱ類） 渡辺和音

・近代詩文書部 坂本奈緒

・前衛書部 浅野玉翠 村井利喜



U23 奨励賞（副賞）



U23 新鋭賞（副賞）



U23 毎日賞（副賞）



佳作賞（副賞）筆置「波おき」
（宮瀬富之 監修）



秀作賞（副賞）文鎮「筆跡」
（宮瀬富之 監修）

第26回書道芸術院 九州支局展開催

「見る、知る、感じる」

令和7年6月17日(火)～22日(日) 大分県立美術館OPAM

報告者 九州支局長 児玉 裕光

2025年6月17日(火)～22日(日) 10時～17時(最終日は16時まで) 大分県立美術館OPAM3階で開催しました。

本部役員(辻元大雲顧問、下谷洋子理事長、小竹石雲常務理事、後藤大峰常務理事、千葉蒼玄常務理事)、会員、準会員83点の出品をいただきました。

漢字、かな、現代詩文書、刻字、前衛書の部門でした。本部役員の各先生方の御作品の前で立ちどまる方が多く質問も受けました。出品者のどの作品も個性や可能性が感じられる作品が多く、日頃の学書の成果が見られました。

今回は案内葉書をできるだけ少なくして、スマホやYouTubeなどを使って広報活動をしました。その効果があったのか700名の来場者がありました。毎日新聞社、大分合同新聞社の取材があり、これも効果があったものと思われまます。

22日には常務理事の千葉蒼玄先生が来場され、午前10時30分から前衛書の実技講座、午後2時から展示作品の解

説をしていただきました。実技では50名の参加がありました。

講座のタイトルは「見る、知る、感じる」で、具体的な内容は

1 前衛書を考える前に「書」とは

2 書とは何を表現するのか

3 「見る、知る、感じる」現代書

4 感じるということ

5 可読性(読む)ということ

6 書の特質

7 書の線とは

8 書の分野

9 現在の前衛書の分類

などをパワーポイントを使用され懇切丁寧にわかりやすく語られました。中でも「一本の線を引くことについてどうしても横一を書く。これが常識となつて新しい形が見えてこない。古典の中には一本の線が多数存在する。どうしても文字を追いかけてしまう。空間、線を感じることに、それが視点を変えることである。芸術活動では既成の概念や形式にとらわれず、先駆的・実験的

な表現を試みることに」等の講話に続いて模範揮毫に入りました。初めて見る方が多く、揮毫されるたびにため息が出ていました。長峰での筆の運び、形等今までに見たこともない分野でした。

その後自分の名前一字を前衛書で書きました。千葉先生の講話や実技を参考にして書きましたが苦戦してしまいました。自分の作品を先生に講評をいただき一人ひとり名前を前衛書で揮毫していただきました。「おっ」という会員の感嘆の声が数多く聞かれました。

前衛書の見方・考え方、実技等に初めて触れる方が多く、参加してよかったという声も多数聞かれました。講演会終了後展示会場に場所を変え、参加者の作品の一人ひとり御指導をいただきました。それぞれの作品の素晴らしいところ、気をつけたいところ等ポイントを端的に指摘してくださり今後の参考になりました。話の中で「感動と挑戦」という言葉が聞かれました。支局会員で今後とも研鑽を重ね、素晴らしい作品作りに励みたいと誓いました。

展覧会・講演会の開催にあたり書道芸術院のお力添えに深く感謝申し上げます。

第27回展は令和8年7月3日(金)～5日(日) 大分県立美術館OPAM 1階で開催します。



会場風景



千葉先生範書



千葉先生作品解説



右は会員、左は千葉先生「和」



千葉先生講演



千葉先生を囲んで

古典鑑賞

(484)

張遷碑（後漢・186年）③

〈解説〉雑誌『墨』（芸術新聞社）の第155号に石飛

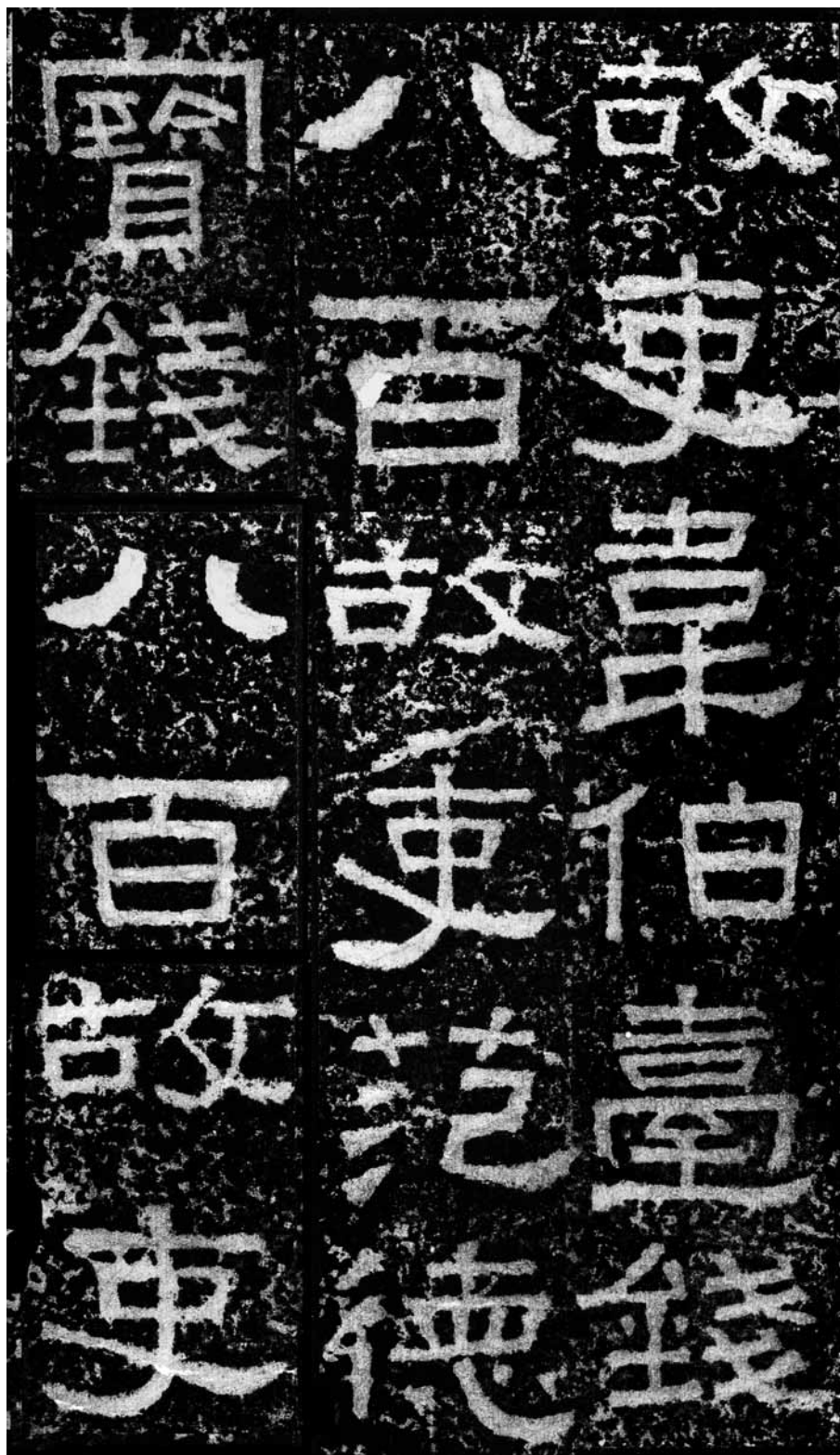
博光氏が張遷碑の臨書のポイントを挙げている。

①書風は古拙雄渾な趣をもち、洗練されたスタイルの対極にあるところが魅力である。六朝楷書の根源をなすとも言われる。

②一本一本の線に表情を。起筆や転折の形が色々

である。時に角張り、時に円みもあって味わいがある。角張っている部分は、藏鋒を多用して力強さを表現する。

③短い波磔や払いが軽率にならないように。力を充実させて、内蔵させることによって素朴さが出る。
(編集部)



※掲載図版80%に縮小（原寸にするには125%拡大して下さい）

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみ可）

漢字研究部臨書課題

（半紙普通判・縦使用）上記掲載部分より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題

（A. 大作の部—毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可）
（B. 小品の部—半切 $\frac{1}{2}$ 以上半切以内・全紙 $\frac{1}{2}$ 以内も可（A・B縦横自由））

当該古典の上記掲載部分以外も可。

〔解説〕今月は『相模集』の部分が課題である。『子の僧の集』と比較して、字粒は大きく、行の右への傾斜も強い。歌の2行目の字数は10字前後と増えて、『子の僧の集』よりも長く書かれている。そのため、余白の景色に違いが生じる。この『相模集』の書きぶりを前号と同様に、二玄社の書道技法講座50(担当は高木聖鶴氏)から引用する。

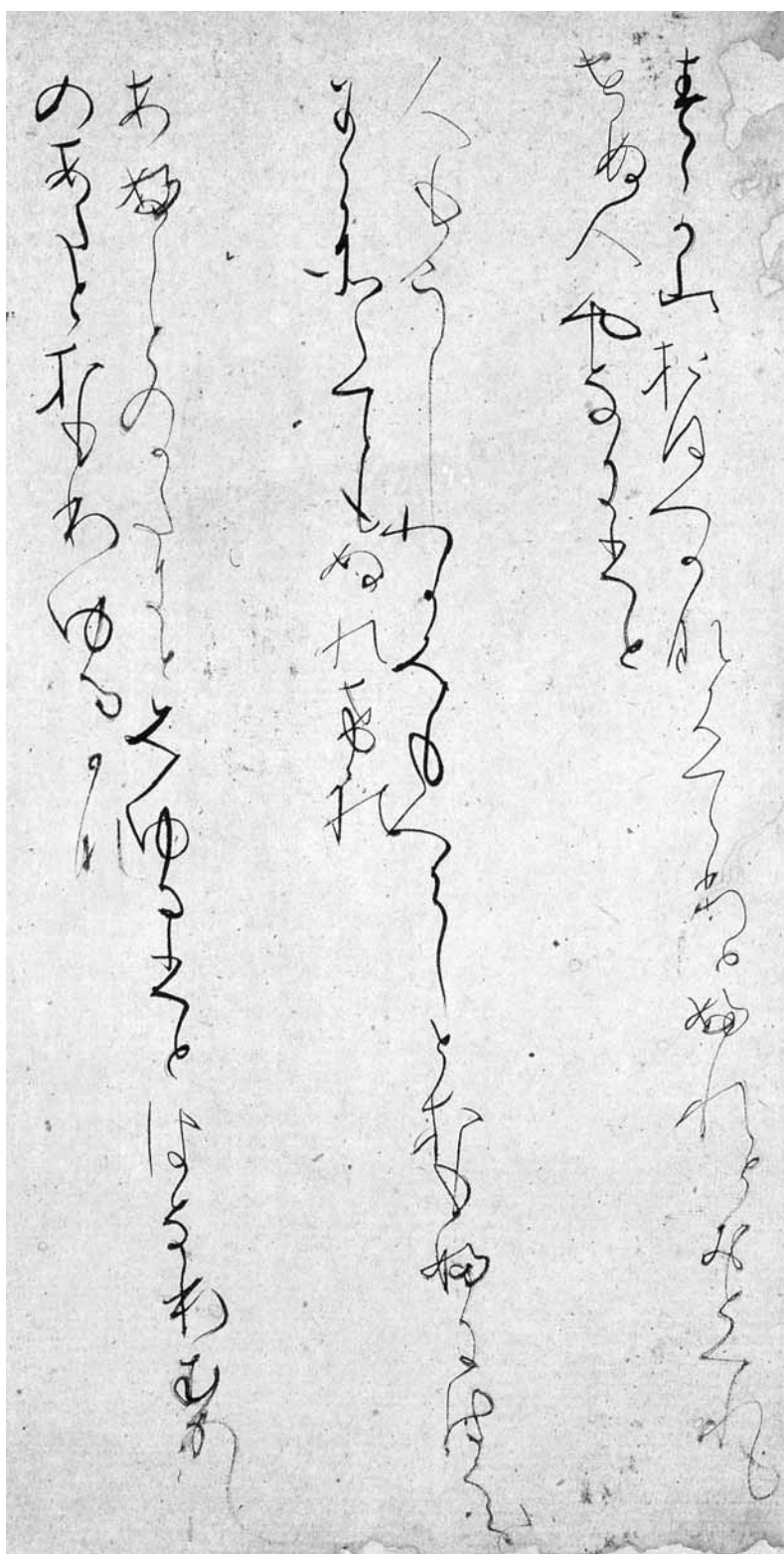
①筆致は自由闊達で精神は極度に高潮し、全書をなげだして書いていな

①筆致は自由闊達で精神は極度に高潮し、全霊をなげだして書いてい

から自ずとあらゆる典型としての則^{のり}を越えることのない端正さを持っている。

②越えそうで越えない、放縦であるが慎ましきがある、そんな両極に向かう強い力を一本の糸で中心に引きつけたような、一種の統一感がある。

③巧みな墨継ぎによって風景を感じさせている。また渴筆をぐいぐい大胆に書き進んでその風景をいっそう深いものにしてている。(編集部)



※掲載図版原寸

かな研究部臨書課題

特別研究部臨書課題

(半紙普通判(料紙可)・縦長に使用) 別紙を裁断して貼付も可。
半懷紙は半紙サイズに切って使用のこと。左記の古筆の掲載部
分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

A. 大作の部⇨毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可
B. 小品の部⇨半切1/3以上、半切以内（縦横自由）

△いずれも左記の掲載以外も可。▽

△いずれも左記の掲載以外も可。▽

へよみ
す^春か山^可お^於ぼ^保つ^可か^可なく^可て^久ほ^本ど^本ふ^婦れ^婦ど^婦お^奈と^本づ^奈れ^本も^本／せ^世ぬ^多人^多や^於な^本に^本び^奈と^奈／人^可も^可う^可し^可わ^可が^可み^可も^可つ^可ら^可し^可とお^於も^於ふ^婦に^婦は^婦う^婦ら^婦く^婦／に^尔こ^所そ^所／で^所も^所ぬ^所れ^所け^希れ^礼／

漢字規定 初段以上 【10月15日締めきり】 用紙 半紙普通判

小竹石雲 選書

良 賈 深 藏 若 虚

よみ (良^{りょう}賈^こは深く藏^{ぞう}して虚^こしきが若^{ごと}し)

書体 自由



習い方解説 (6)

小竹石雲

良賈深藏若虚

(史記)

(良^{りょう}賈^こは深く藏^{ぞう}して虚^こしきが若^{ごと}し)

良い商人は、商品を店頭には出さず蔵の中にしまっていて、品数が乏しく見えるものだ、の意。賢明な人は才能をむやみにひけらかさないことのたとえ。

行草作品に思うこと

行草作は表現領域が他の書体に比べて広い。そして年齢、キャリアによって好みも変化していくので興味が尽きない。反面、勉強のやり方にもよるが惰性的作品に陥りやすい。基本的な王羲之あたりを根底におき幅広い書作を楽しんだ後、王羲之に帰るのが良いとされている。

ここでは単体で極端な変化は避け、参考例では大胆な運筆で一気呵成におもいきって筆を走らせた。

〈参考〉



漢字規定 秀級以下 【10月15日締めきり】 用紙 半紙普通判

前田龍雲選書

習い方解説 (3)

前田龍雲

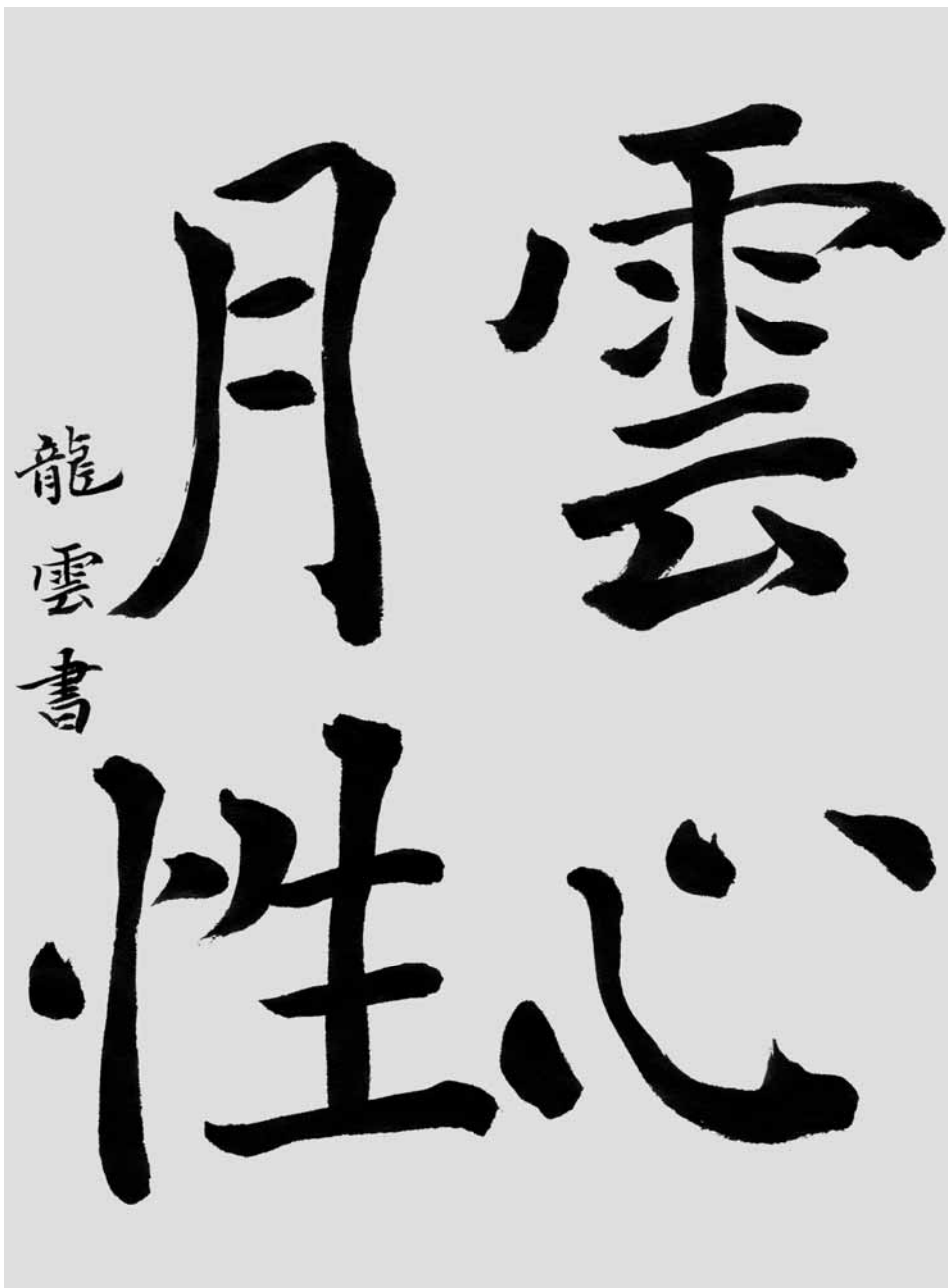
雲心月性
(雲心月性)
(四字熟語)

世俗の名誉や利益にこだわらない。雲や月のように無欲で清らかな性質を持ち、淡々と生きる人や心のこと。

名誉や強欲を追求する人間がいる。そのようにはなりたくないとの思いで撰文した。

初唐の代表的な三大家、歐陽詢の「九成宮醴泉銘」、虞世南の「孔子廟堂碑」とともに名高い、褚遂良の「雁塔聖教序」を参考に書いた。

線質は、抑揚と粘りがあり、緩急・強弱の変化に富んでいる。細身でありながら運腕大きく悠然とした書風で、ときには行書・草書的で豊かな趣きがある。筆先のバネを利かせた抑揚変化が最大の特徴である。じつくりゆっくり運筆した。



雲心月性
よみ (雲心月性)

書体Ⅱ楷書

かな規定 初段以上 【10月15日締めきり】 用紙 半紙普通判(料紙可)

下谷 洋子 選書

習い方解説 (3)

下谷 洋子

うたた寝の朝けの袖に変わるなり
ならず 扇の秋の初風

(式子内親王「新古今集」)

うたた寝から覚めた朝の袖に感じる風が変わったようです。夏の間ずっと従者があおいでくれた扇の風から、秋の初風に。

今回も、散らしとしては基本形です。ただ短い行を入れているため、面として見ると奥行き(立体感)が生まれていると思います。

かなの、この短い行を入れる方法は、平安時代後期になると、変化を求めてたくさん表れて来ます。

△注意点△

- ・2行目は、短い行が寄り添いやすいように、やや右に傾斜している
- ・5行目のなら春も少し傾斜し、次の長い行は、その短い行に添うため大きく傾斜し、全体をまとめる
- ・傾斜する行は、あまり複雑な変体はなは避けた
- ・あくまで、互いの行が直立しないこと

・墨量の変化も重要なポイント

美しくバランスの取れた散らし書きを創って下さい。

墨継ぎは「里」です。

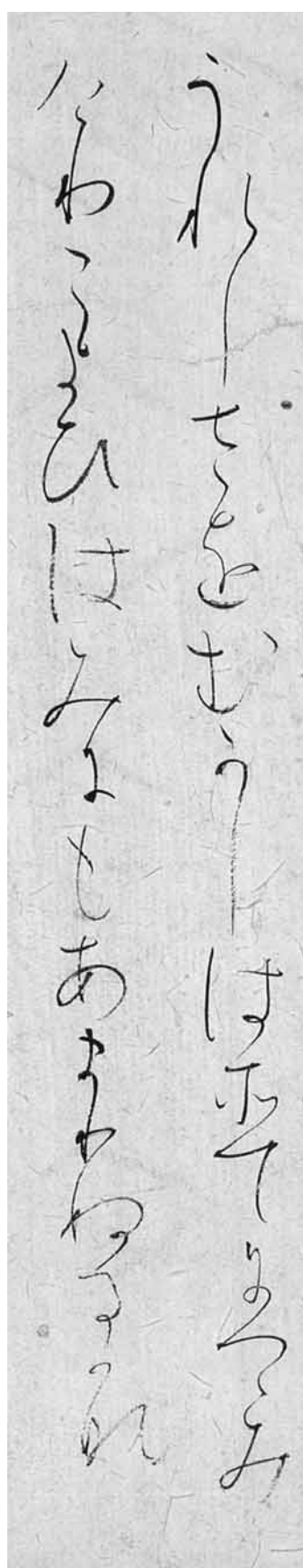
よみ方

うた(多)た(ゝ)寝(年)の(能)朝け(希)の袖(そ)弓(に)に(尔)変(か)者(る)な(那)り(里)
ならず(春)扇(あふ支)の(農)秋の初(八)風(可)せ

創作

*料紙は半紙版(33.0×24.5cm)を使用しましょう。半懷紙は上記のサイズに切って下さい。

かな規定 秀級以下 【10月15日締めきり】 用紙 半紙タテ1/2 (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)
掲載写真の和歌を臨書する。部分臨書も可。〈注〉署名は「〇〇臨」。粘葉本和漢朗詠集(掲載写真拡大120%)



よみ方

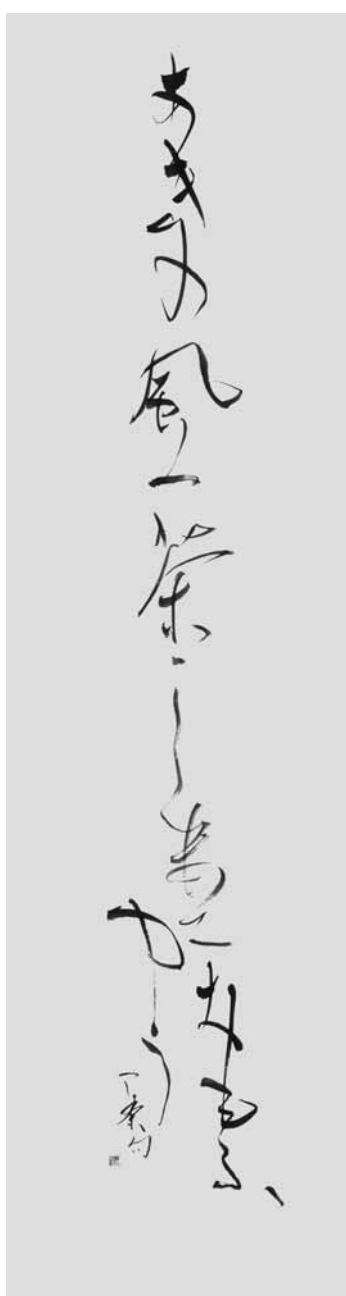
うれしさをむかしはそでにつゝみ
けりこよひはみにもあまりぬるかな

歌意

うれしさを昔は袖に包んだものですが、今夜のうれしさは袖に包みきれないどころか、身にも余ってあふれ出すほどです。

かな条幅規定 【10月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切(料紙可)

見越雪枝選書



よみ方 秋(あき)の風(かぜ)一茶心(ひと)に(こ)思(おも)お毛(け)ふやう

創作

※タテ形式に限る

習い方解説 (3)

見越雪枝

秋の風一茶心に思ふやう

(小林一茶)

小林一茶は飄々として庶民的、率直で親しみやすい人柄が作品にも表われています。直筆の軸の中に托鉢の後姿の絵が描かれており細字で「歌も一茶、描も一茶」と記されていたのが記憶にあります。墨継ぎはおでしました。多様な字組みをして楽しんで下さい。

漢字条幅規定 初段以上 【10月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

名越蒼竹選書

習い方解説 (3)

名越蒼竹

終古雲高簇此城 秋風吹散馬蹄聲

(譚嗣同)

(終古雲高くして此の城に簇り 秋風吹き散ず馬蹄の声)

書体Ⅱ自由

漢字条幅規定 秀級以下 【10月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

種谷萬城選書

習い方解説 (3)

種谷萬城

雨洗月色新

(岑参)

(雨洗いて月色は新たななり)

書体Ⅱ自由

今月は「雨上がり、雲一つない濃紺の空は雨に洗われ、出たばかりの月の光は澄々としていて。」唐・岑参詩中の句を、神龍半印本蘭亭序風の行書で倣書しました。行書学習の必修古典です。原本を鑑賞、臨書し、王羲之の正統な行書を学びましょう。本誌連載中の『漢字書基礎基本講座(9)』と関連動画を参考にして下さい。

今月は横の関係について考えます。基本は左右の噛み合わせの良さの追求で、上下のバランスとともに章法に関わる問題です。まずは左右隣りあった部分が似た特徴を持たないようにすることです。つまり、文字の長さや広さ、線の太さと細さ、直線と曲線、潤筆と渴筆、字間の広さと狭さ等の同一を避けることで章法がまとまります。

※タテ形式に限る

智恵子は遠くを見ながら言ふ。
阿多多羅山の山の上に
毎日出てゐる青い空が
智恵子のほんとの空だといふ。
あどけない空の話である。
高村光太郎「あどけない話」より英晴書

◇用紙 ハガキ大(14.8×10 cm)の白紙を使用
◇黒インクのペンを使用(ボールペン・フェルトペン可)

書体＝自由

【注意】

用紙の大きさにばらつきが見られます。

用紙サイズ(ハガキ大14.8×10 cm)を守って下さい。

習い方解説 (3)

鈴木英晴

福島県二本松市油井の集落には、智恵子の生家が復元されており、そこからほど近い鞍石山は、光太郎と智恵子が「あれが阿多多羅山」「あの光るのが阿武隈川」と指呼した「樹下の二人」の詩跡の地となっています。また、安達太良山のゴンドラリフトの山頂駅の近くには「この上の空がほんとの空です」と刻まれた標柱が立っており、どこまでも澄み渡った青空が広がり、智恵子の想いがよみがえります。

今回は行書で連綿を取り入れて書いてみました。連綿はかなの臨書を繰り返しながら覚えていくことを勧めします。無理につなげず、切るところは切って書いたほうが自然で見た目も美しくなるようです。

智恵子は遠くを見ながら言ふ。
阿多多羅山の山の上に
毎日出てゐる青い空が
智恵子のほんとの空だといふ。
あどけない空の話である。
高村光太郎「あどけない話」より〇〇書

季節の言葉・七十二候

寒露第一候

鴻雁来賓す
こうがん

霜降第二候

草木黄落す

立冬第二候

地始めて凍る

小雪第三候

閉塞して冬となる

大平 邑峰

季節の言葉・七十二候／寒露第一候 鴻雁来賓す／霜降第二候 草木黄落す／
立冬第二候 地始めて凍る／小雪第三候 閉塞して冬となる／氏名

書体＝自由

（掲載手本85％に縮小）

- ◇小筆・筆ペン・サインペンなどを使用 署名は各自の氏名(号)を
- ◇用紙は普通版半紙横 $\frac{1}{2}$ (24.5×16.5cm) B5版コピー用紙(26.0×18.1cm)も可
- ◇所定の出品券を作品の右下に貼る

漢字部 師範 尾形 紅霞

懐の広い悠然とした筆致で情熱を内蔵した力作。2行目2字の処理が1行目の3字と調和する。
◎漢字部総評 行草作品も書風の工夫が見られた。気迫満々なもの、静寂感のある作、整齊なもの等実に楽しく拝見できた。(石雲評)

かな条幅部 四段 小沼 厚子

温かみのある線で、墨色の使い方もよく把握している。最後の潤筆の間合いのリズムに惹かれた。

◎かな条幅部総評 時鳥のように

熟語を漢字で書く場合、書体は揃えた方が自然ノ群も誤字が多かった。手本をよく理解したい。(洋子評)



漢字条幅部 師範 三浦 小樹

筆先の微妙な変化を巧みに用いた線が爽やか。字形も安定し、品性の高い、温雅な趣きの行草書。

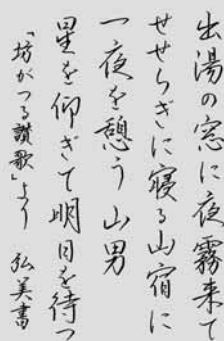
◎漢字条幅部総評 上級は行草書

作品に秀作が多見。轉、南、燕字に誤字が見られた。校字を大切に。下級下位にも秀作を見た。(萬城評)



ペン字部 師範 浅野 弘美

鍛錬された見事な美しい行書体。ペン先を自在に活かし、緩急のある気脈一貫した魅力的な作品です。
◎ペン字部総評 まとまった作品が多かった。行間を意識して文字の大きさを決めていくことで立体的な作品に仕上がります。(孝子評)



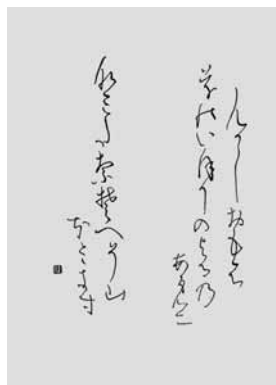
現代詩文書部 特選 大友 四峰

羊毛筆の用筆法抜群で太細の変化見事。命毛一本の細線は余白に語り掛け響き合い、美の世界へと。
◎現代詩文書部総評 書は線の芸術。筆の穂先が立つように用筆法を習得して欲しい。(恵鳳評)



かな部 師範 梅津佳代子

字形が美しく筆先を効かせた強い線条は作品全体の品格を表出している。筆圧の変化のリズム秀逸。
◎かな部総評 潤渇の変化とリズムが上手く調和して美しい散らし書きに仕上がっている。保と奈の変体がなにご注意を要す。(峰子評)



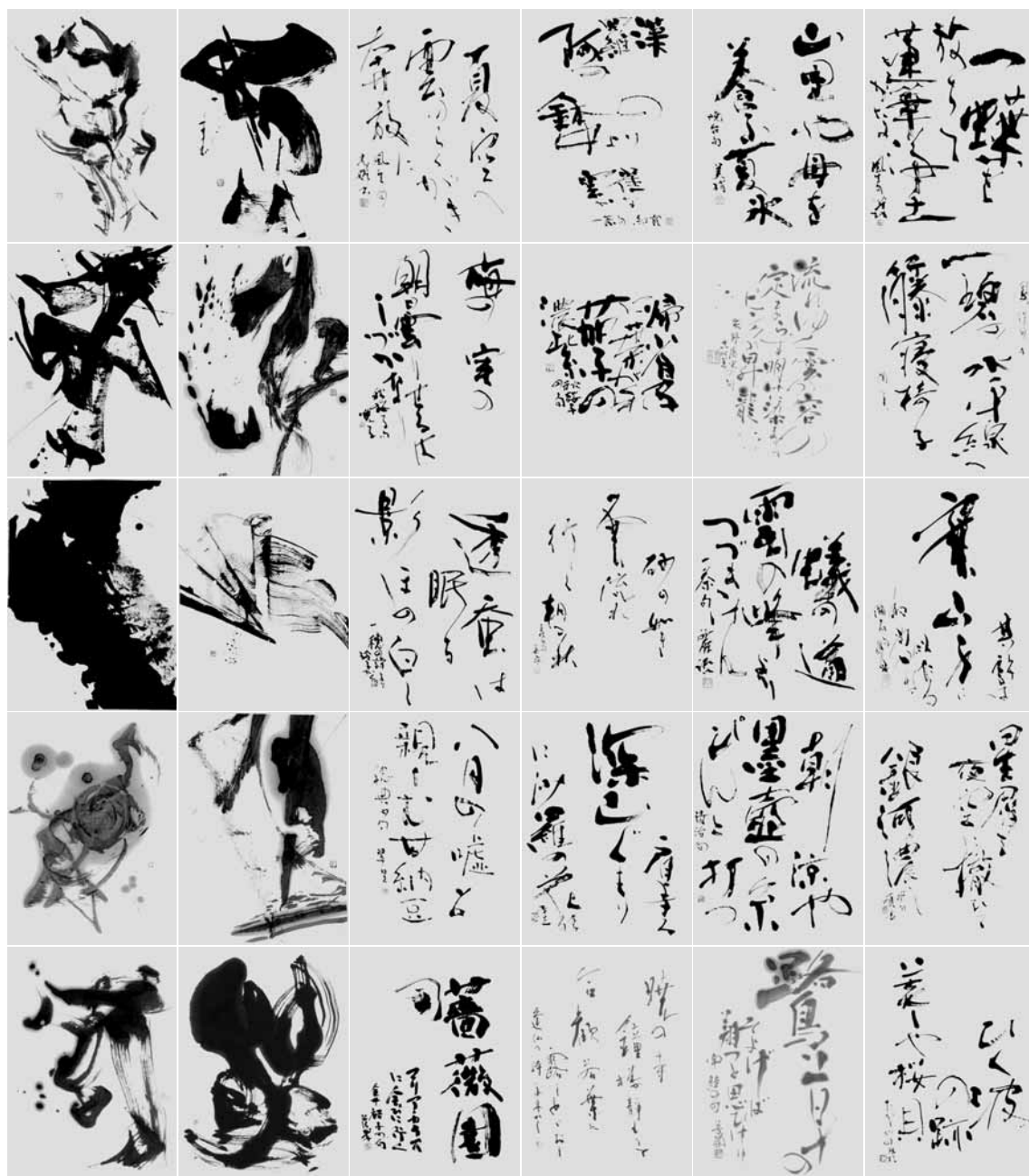
前衛書部 特選 原島 春汀

弾力あり、スケールの大きな線質により、安定感、温か味のある魅力作。
◎前衛書部総評 工夫作品も多いが、読める作品もあり、造型や線質にもう一工夫ほしい。(仙岳評)



前衛書部(特選)

現代詩文書部(特選)



弘雅有成紫
子悠希美江
大 有 重
胆 然 厚
な 自 成
線 然 変
質 筆 化
力 遣 あり
強 違 筆
く 見 遣
良 事 遣
作 事 事

選評 大石仙岳

溪翠玲悦光
翠里子子耀
大 運
字 腕
と 大
小 直
字 線
の 的
バ 線
ラ 動
ン いた
ス 残
ジ る

永杏藤恭紅
舟邑象子霞
詩 自 構
情 然 成
の 然 見
世 流 事
界 骨 余
へ 力 白
と ある 美
誘 線 界
わ 佳 界

芳彩麗喜美
蘭苑流美梢
悠 淡
々 墨
と 色
情 美
景 美
が しく
浮 清
か 涼
ぶ 感
あ

珠順雅閒苑
鈴香悠美柚
錬 空
度 間
が 処
高 理
い 成
線 功
で 余
筆 白
致 活
見 き
事 る

選評 飯沼恵鳳

大作の部

現代詩文書 (大拙) 畠中成山「黒田杏子の句」



畠中成山書

60×240cm

◆熟練した大胆な筆致で大きな呼吸の筆の開閉を駆使し、魅力的な作品に仕上がった。最終行「に散る」の「に」の位置は疑問である。(鄭雲評)

前衛書 (容洲) 阿部邑里「鳥と花と」



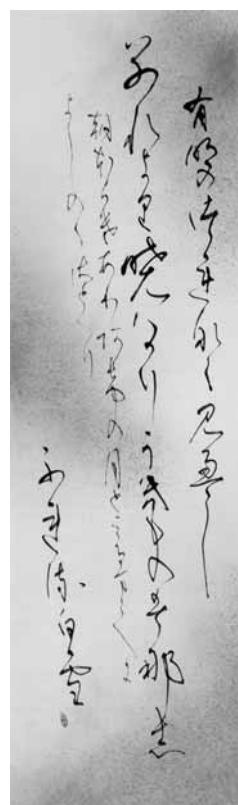
阿部邑里書

79×182cm

◆紙面全体が引き締まった渴筆で統一されて広がりがあり、雄大な作となっている。下部の構成に注意されたい。(仙草評)

かな

(奥田) 小林溪姫「ありあけの」



小林溪姫書

170×53cm

◆2行目を主軸に行間の広狭も理に適い、メリハリの利いた構成が見事。行の変化に伴い墨量も工夫し、最後の傾斜が心憎い。(洋子評)

臨書

(大雲)

舟寶恵美「張遷碑」



135×70cm

舟寶恵美臨

◆角ばった字形とゴツゴツした線の表情を捉えた。筆勢を加えた表現で、明るく、爽快な臨書に仕上げ、魅力盛り込んだ。(萬城評)

〈大作の部〉

創作の部(39点)

漢字—1点

かな—8点

現代—10点

前衛—20点

臨書の部(8点)

漢字—8点

かな—0点

総出品点数
47点

〈特選候補者〉

(創作の部)

「漢字」

秀恵 阿部 雅悠

「かな」

奥田 橋本須美子

奥田 秋山 珠音

奥田 藤井 清美

「現代詩」

四枝 奥川 麗流

誠和 石崎 甘雨

AI 清水由紀子

「前衛」

蓮紅 大友 紅蓉

一弦 工藤 和香

青蓮 佐々木 藍水

玄象 中田 千代子

一弦 道塚 紫音

月華 浅野 玉翠

蓮紅 佐藤 紅茜

(臨書の部)

「漢字」

素朴 坂本 素朴

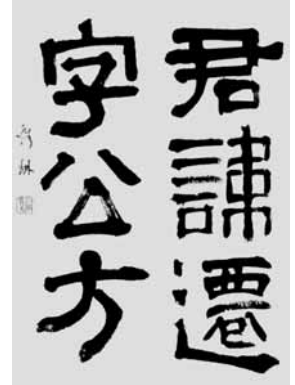
書游 庄司 咏艸

青湖 北嶋 青湖

漢字研究部
(張遷碑)

選評 児玉 頼光

今月のホープ作品



鈴木 谿 琳

漢字研究部 特選 鈴木 谿 琳

黒と白の余白が生き、6文字の大きさも調和のとれた見事な作品です。切れ味が鋭く、粘りのある線質で表現されています。渴線が美しく華麗で作品効果を高めています。落款も素敵です。今後一層の御練筆を期待します。

◎漢字研究部総評

紙面に対して文字の大きさのアンバランスな作品、線の太細など一考の余地がある作品

が多く見受けられました。運筆の遅速については、かなり粘られた作品が多く見事でした。また、起筆の筆遣いに迷いがあり、基本的なことが理解できていない作品もありました。これらのことを参考に、指導者に御手本などをお願いする際は、書いている姿を見て自分の課題を克服することです。基礎的・基本的な事柄を学び、書道の楽しさを味わって下さい。



天義美咲弘雅
翔則翔子美悠



早紫美明陽光
苗水楓夏子華



間友祥美満輝
香里扇佐里峰



茉佳桂春龍清
穂子香麗仙玉

かな研究部 (針切)

選評 都 丸 みどり

今月のホープ作品



小 暮 真 紀

かな研究部 特選 小暮真紀
針切の名前のおり、細く鋭い線がリズムカルに続き、スピード感を出している。無駄のない線で、字形も上手く整い自然な仕上がりになった。
◎かな研究部総評
「ほととぎす」の見せ消し部分は「支」が正しい。
「ぎ」や「ま」多数。他ある所「は」べれば「誤り」多数。
課題図版の左横の「へみ」を確認のこと。

かな研究部成績表

上森菊仙楓清 泉か地月台会月	竹明高た秀 美香真か畝	麗玉静書蓮 澤川翠泉紅	七五三本磯大 田津藤上井田	渡邊意春青水 本津本子達莖	有も恵上静 秋泉泉泉	◎小暮真紀	特選
井伊池新熱浅相 藤田井海井川	櫻矢梅梅小川 田部山津元藤上	富佐井五三本磯大 田津藤上井田	渡邊意春青水 本津本子達莖	有も恵上静 秋泉泉泉	◎小暮真紀	特選	
清幸幸恵桃和京 泉子子子翠江子	智香久代直菜 舟苑子子仙奈	美清津佳里紀 子美子心舟子	有も恵上静 秋泉泉泉	◎小暮真紀	特選		
紅玉八紅澄高上た上 瑠川街風春崎月泉か泉	玄千千紅玉清堺秀瑠 穹精葉風松月	玉田田高嶋推佐 田田田中山山	清嶋推佐 嶋推佐	有も恵上静 秋泉泉泉	◎小暮真紀	特選	
藍澤作留書 白瑠御三松深原原 瑠園浦津堀澤部野	生芳小代清裕典 瑠樹子洗子朗	子子子子子子子 子子子子子子子	有も恵上静 秋泉泉泉	◎小暮真紀	特選		
光常文松 彩盤筆村入	幸青あ八華白石上掃高 扇運か街祥露習泉雪真	高崎綾書青清竜竹た 崎綾書青清竜竹た	有も恵上静 秋泉泉泉	◎小暮真紀	特選		
浅秋青青 川富木木	山山本村三松松本福廣濱二西長永井寺高代猿 崎崎上澤村丸多瀬瀬通川島井前澤橋干渡々々	有も恵上静 秋泉泉泉	◎小暮真紀	特選			
澄甲華紅水白麗紅書常高澄燈明秀八大書聖素う遊一秀青大正樹大森旭明玄正秀梅玉澄帝千立や華日白あ藍江洞埴もく 春和祥瑠茎露澤瑠泉盤崎春会漢る生拙柳汀堂春の山心畝湖雲草原雲地老漢穹華畝桃川春塚葉精ま祥新琉か龍書和水も澄	高高高高 橋藤高木百 幸松昭台百 苑華子汀子雨	有も恵上静 秋泉泉泉	◎小暮真紀	特選			
選外	こ昌東華祥玉清高た一春青中墨梓黎幕楓玉も長佑青正は青上白一正も墨水蒼大松天京白堺福清竹A泉恵天青墨有棟 外だ宛伯仙榮鎮川崎月か弦汀湖川宣江明張会川く月朋湖華せ湖東露心華く緑奎田阪村璋橋嶺山月扇I会石満湖緑秋高	有も恵上静 秋泉泉泉	◎小暮真紀	特選			

審査会員の部 結果発表 (出品数 漢字25点・かな12点)

選評 小竹石雲・平川峰子

漢字秀逸作



奥村 美楓



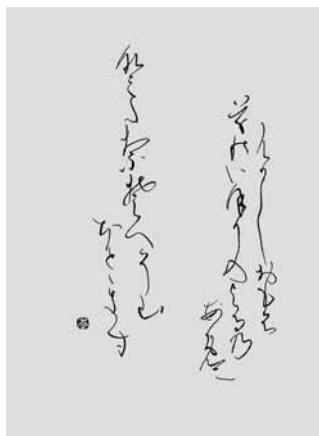
臼井 真理



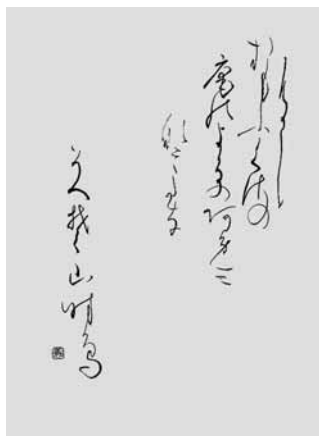
吉田 溪花



大内 熒軒



清水 蘭舟



佐藤 一義

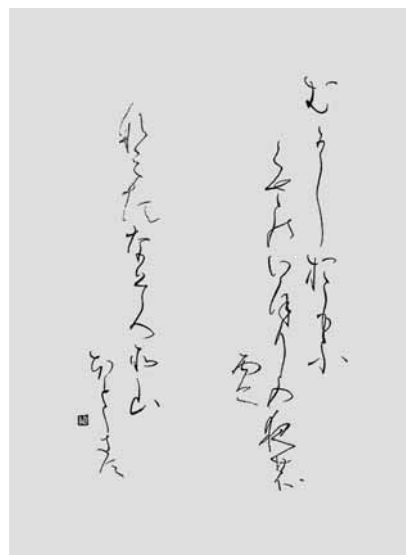
〈次点・50音順〉

西川 藤象



清爽感あふれる作。書き込まれた筆線に無理がなく、練度の確かさがうかがわれる。自然な造形と流れが相俟って格調高く仕上がっている。(石雲評)

かな秀逸作



茂木 絢水

筆圧の強弱にリズムを取りながら、潤濁の変化美しく、行間の余白にも工夫のあとがうかがえて、全体を上品に仕上げた作です。(峰子評)

第64回
白扇書道会展

併催
第64回全国学生書道展
第37回日中友好書道展

会期 2025年9月17日(水)～9月21日(日)

会場 千葉県立美術館
開館時間▶AM9:00～PM4:30 (入場無料)
千葉市中央区中央港1-10-1 TEL. 043-242-8911
一般部▶役員作品・一般公募作品
学生部▶第64回全国学生書道展
中国の部▶第37回日中友好書道展

主催 白扇書道会
第64回 白扇書道会展事務局
〒200-0042 千葉市中央区椿森1-18-4, 901 緑谷蔵城方
TEL・FAX 043-284-4281

後援 千葉県教育委員会・千葉市教育委員会・(公社)全日本書道連盟
(公財)書道芸術院・毎日新聞社・千葉日報社

第19回若葉会書道展

●会期 令和7年11月7日(金)
～9日(日)

10:00～17:00
(最終日15:00まで)

●会場 八戸市美術館
〒031-0031
八戸市番町10-4
TEL 0178-45-8338

●主催 若葉会 (代表) 中村雅臣

●後援 八戸市・八戸市教育委員会・
(公財)書道芸術院・八戸市文
化協会・デーリー東北新聞社、
東奥日報社・(株)八戸テレビ放送

第74回 玄遠社書展

●公募作品 (一般の部・学生の部) ●指導者展

併催 小伏竹村遺墨展示

●日時 2025年9月17日(水)～9月21日(日)

10:00～17:00

●会場 大阪市立美術館 天王寺ギャラリー (天王寺公園内)
地下第1・第2展覧会室 TEL. 06-6771-4874

主催 玄遠社

後援: 大阪市・大阪市教育委員会・大阪市立美術館・毎日新聞社・(公財)書道芸術院

書展

第39回

書泉会展

町山美扇

会期＝令和7年7月22日(火)

27日(日)

会場＝東京銀座・鳩居堂画廊
3F・4F

夏らしくオレンジ系にアレンジされた大きな盛花が中央に飾られた会場で、主宰者の下谷洋子先生の優しい笑顔にお出迎え頂きました。

3階は、下谷洋子先生、御尊父の下谷東雲先生、幹部の先生方の玉作が展示されており、洋子先生は、合わせて3点出品されておりました。

華麗でゆるぎない書線、自在な構成、選り抜かれた料紙を堪能させて頂きました。



3Fのメイン会場



4Fの会員による貼りませ



若手コーナー

幹部の先生方も、軸装、額装、巻子に、自分の表現を求めている、作品のレベルの高さに、敬服いたします。

4階は、中堅の方々の作品でした。中でも壁面一面を使用して44名による貼りませは、創作、臨書がバランス良く構成され、存在感がありました。また、つばみ6人として選抜された方が、顔写真とともに紹介され、大きな期待が寄せられていることが伝わり、書泉会の次代を担う方々として、頼もしく拝見しました。

2階の隅り場に、洋子先生の寸松庵風の額装が、茶花とともに展示されておりましたのも、心に強く残るコーナーでした。この小さな茶花は、会場の処々に季節の花で生けられ、かな書展らしさを一層引き立てていました。

かな書の魅力である美しい料紙、雅びやかな表装を、楽しみながら良い勉強をさせて頂きました。

拝見の後は、汗も引き、すがすがしい思いで、ますますの御発展を祈りつつ銀座を後にしました。

書道芸術院秋季展

●書道芸術院役員 ●審査会員選抜 ●審査会員候補公募

会期＝令和7年10月7日(火)～12日(日)

10時～18時

(最終日は17時迄)

(最終日のアートサロン/毎日は14時迄)

会場＝セントラルミュージアム銀座

東京都中央区銀座3-9-11

紙パルプ会館5F ☎03-3546-5855

〈併催〉書道芸術院前衛書展 (24名出品)

会場＝アートサロン毎日

東京都千代田区一ツ橋1-1-1

パレスサイドビル1F ☎03-3212-2918

主催＝(公財)書道芸術院 理事長 下谷 洋子

後援＝毎日新聞社 (公社)全日本書道連盟 (一財)毎日書道会

〒101-0031 東京都千代田区東神田1-16-7 東神田プラザビル3F ☎03(3862)1954

創刊号から作品を3点ほど転載し、紹介します。

『書道芸術』クロニクル・補遺

「ひとり」



山本 聿水

「作品」



和井田 要

「華」



〈原寸〉

石井 双石 (雙石)

日本の書道文化ユネスコの無形文化遺産登録に

2025第12回毎日書道群馬展

併催 第76回毎日書道展受賞者(毎日賞・秀作賞)展

第33回国際高校生選抜書展入賞入選作品展

会期 令和7年10月3日(金)～10月6日(月)

10:00～17:00 最終日は16:00まで

常任顧問

顧問

相談役

実行委員長

副実行委員長

審査会員

【漢字部】

【かな部】

【近代詩文書部】

【大字書部】

【刻字部】

【前衛書部】

【会 員】

【漢字部】

【かな部】

【大字書部】

【前衛書部】

【毎日賞】

【漢字部】

【かな部】

【前衛書部】

【秀作賞】

【漢字部】

【かな部】

【前衛書部】

下谷 洋子	上原 修陽	西林 乗宣	藤枝 豊子	大辻 多希	星島 李舟	福野 聖山	北村 白琉	但木 三郎	山崎 初美	松村 大樹	高橋 上三	井上 市求	荒井 井林	倉林 紅瑠	池田 大川	大金 井林	小関 林口	荻原 松井	朝倉 木村	鈴木 丸見	田都 逸松	新井 小永	青木 小此	鎌田 高木	三木 三木	金子 心佳	大崎 友里	姪川 友香	新井 渡邊	一倉 鶴淵	てい 雲海	雲 恵翠	亜 希	
新井 大川	京華 清子	大井 塚越	美津 紅東	江 苑舟	村田 容子	西川 横尾	翠 隆九	嵐 雲代	増田 幽心	田子 白嶺	星野 青龍	岡田 琇韻	泉翠 緑子	妙美 香京	原 久保	上 清野	原 水口	原 林口	山 清善	清水 利福	堀宮 尾根	梅山 井尾	金坂 富津	久江 子玄	久江 子玄	久江 子玄	久江 子玄	久江 子玄	久江 子玄	久江 子玄	久江 子玄	久江 子玄	久江 子玄	久江 子玄

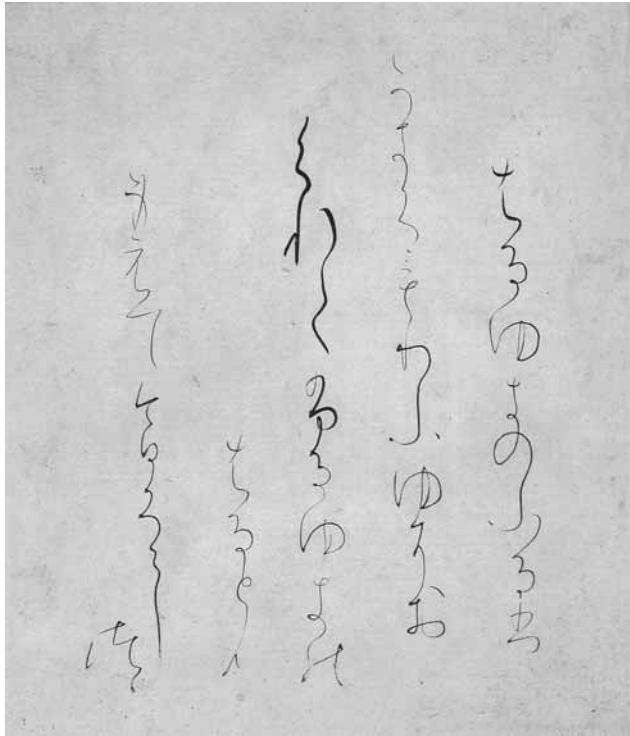
(第33回国際高校生選抜書展入賞入選作品展)

県立伊勢崎清明高等学校・県立渋川女子高等学校・共愛学園高等学校

古筆鑑賞

259

升色紙 (伝 藤原行成筆) ①



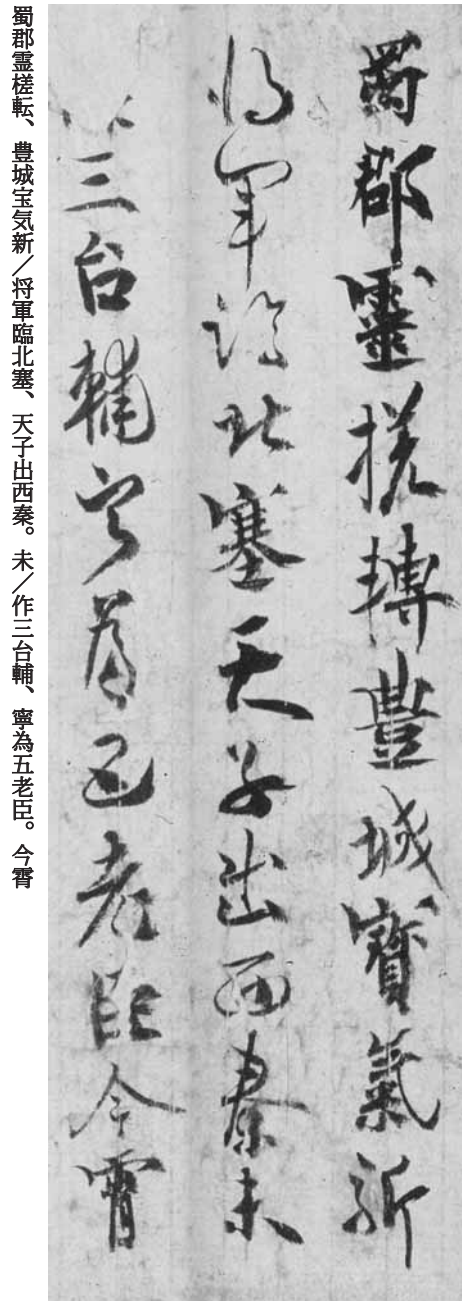
(掲載図版・70%に縮小)

可久は者
かきくもりゆきのふるひ
くれてふるゆきのお
みえで今日くら
つ

古典鑑賞

485

李嶠詩断簡 (嵯峨天皇筆) ①



(掲載図版・70%に縮小)

蜀郡靈槎軒、豊城宝氣新／將軍臨北塞、天子出西秦。未／作三台輔、寧為五老臣。今霄

特別昇段級試験

一、しめきり日 9月15日(月)

秋季は、作品募集を次のようにいたします。

漢字 一種、二種、三種
かな 一種、二種
漢字条幅 一種、二種
かな条幅 一種、二種、三種
ペン字 一種、二種、三種
かな、漢字条幅の三種は、春季募集となります。

二、応募資格

・一人で幾つの部にも応募できる。

・第一種

現段級が特級、10級、新規

・第二種

現段級が初段、3級

(4、10級の方は受験できない)

・第三種

現段級が準師範、秀級

(優級以下の方は受験できない)

三、課題文字と用紙

(創作文字は新旧字体どちらでも可)

※漢字・かな・漢字条幅・かな条幅の臨書作品は、6月号の写真掲載の中から〔指定文字数〕を臨書。

漢字部

半紙Ⅱたて長に使用

第一種 (1枚)

楷 臨書 高貞碑 (掲載部分から5文字を臨書)

第二種 (楷・行 計2枚)

楷 創作 密竹使徑迷 (謝靈運)

(密竹徑に迷わしむ)

行 臨書 集字聖教序 (掲載部分から12文字を臨書)

第三種 (楷・行・草 計3枚)

楷 臨書 雁塔聖教序 (掲載部分から細字24文字を臨書)

行 創作 來人忘新術

去子惑二故蹊 (謝靈運)

(來人新術を忘れ去り故蹊に惑う)

草 臨書 十七帖 (掲載部分から6文字を臨書)

かな部 半紙Ⅱたて長に使用

・料紙可、各臨書は料紙を裁断して貼り付け可。

・かな部創作・臨書はともに落款は印のみ可。

・かな・漢字の変更自由。

第一種 (臨 1枚)

臨書 高野切第三種

(半紙1枚に2首を臨書)

第二種 (臨・創 計2枚)

臨書 関戸本古今集

(半紙1枚に全てを臨書)

創作 天つ星道も宿りもありながら空に浮きても思ほゆるかな (菅原道真)

漢字条幅部 小画仙紙半切Ⅱたて長に使用

第一種 (1枚)

創作 居常以待終

(謝靈運)

第二種 (楷・行 計2枚)

楷 臨書 顔勤礼碑 (掲載部分から14文字を臨書)

行 創作 漁翁夜傍西巖宿

曉汲清湘然楚竹

(柳宗元)

(漁翁夜西巖に傍て宿す曉に清湘を汲み楚竹を然く)

かな条幅部

創作は小画仙紙半切をたて長に使用(料紙可)
臨書は半紙を横長に使用

・かな条幅部の創作・臨書の落款は印のみ可。

・創作は、かな・漢字の変更自由。

第一種 (創 1枚)

創作 家ふたつ戸の口見えて秋の山

(鈴木道彦)

第二種 (創 計2枚)

創作 空遠く声あわせ行く小鳥かな

(炭大蔵)

創作 田の面より山もとさしてゆく鷺の近しとみれば遙かにぞとふ

(伏見院)

第三種 (臨・創 計3枚)

臨書 関戸本古今集

(半紙横1枚に全てを臨書)

創作 山伏の火をきりこぼす花野かな

(志太野坡)

創作 ゆく水の末はさやかにあらはれて川上くらき月のかげかな

(香川景樹)

ペン字部

はがきの大きさ(10×10白紙)Ⅱたて長に使用 黒インク使用

魚戯れて新荷動き

鳥散じて余花落つ

芳春の酒に対わずして

青山の郭を還り望む

謝朓の詩の一節を ○○書

第一種 楷書 (1枚)

第二種 楷・行 (計2枚)

第三種 楷・行・草 (計3枚)

四、名前のかき方

◎どの部も落款を入れる。

・創作は○○書、臨書は○○臨と書く。

・ただし、かな部かな条幅部の創作・臨書いずれも印のみ可。

五、受験料

第一種 一、五〇〇円

第二種 三、〇〇〇円

第三種 四、五〇〇円

◇納入は昇段級試験用振替口座、または現金書留でお願いします。

六、審査結果と昇級

成績に応じて、次の通り昇段級させる。

第一種は、最高秀級まで

第二種は、最高二段まで

第三種は、最高師範まで

七、応募手続

1 出品票はバーコード出品券を使用し、9月号(73号)の段級を記入(昇試出品券を貼付欄に貼る)。

一種は作品の右下に貼る。二種・三種は1番上のみ、作品の右下に貼る。

2 作品2枚以上ある時は、右上をホチキスまたはのりとする。

3 団体支部の方へは事務所から応募書類一式を送付する。

4 個人で受験希望の方は、はがきで申し込む。

5 受験申込み締切は8月21日(休)

(申し込み期限を過ぎましたが、希望者は大至急申し込みを)

・申し込み先

〒101-0031 千代田区東神田1-16-7

東神田プラザビル三階

公益財団法人 書道芸術院

書道芸術編集部特別昇段級試験係

応募書類は9月1日以後に整理

発送。送付された応募書類に必要事項記入の上、作品に添え応募する。

競書出品規定

※規定部・自由部・研究部は、月別出品券を貼ったバーコード出品券を、作品の右下にヤマトのりで貼る。

※特別研究部は所定の出品券を、作品の右下にヤマトのりで貼る。

※半紙は縦使用に限る。

※落款(印のみ可)を入れる。

●出品資格 高校生以上

●月例競書作品出品の心得

1、締切日必着厳守

2、月別出品券を貼付していないバーコード出品券は認めない

3、月別出品券のコピーは不可

4、(一)初めて出品のときは「10級」と書く
(二)「課題違反」・「落款なし」等の違反

作品は審査対象外とし、違反作品として氏名を掲載します。

※▲印段級誤記入

※△印作品審査後着

*段級欄に記入する数字は、

級位は算用数字1、2、3...

段位は漢数字 初、二、三...

で書いてください。

*級位の方は、出品する月の本誌(最新号)で成績を調査確認の上、級を記入してください。確認できないときは、現在級を書き「未調査」と明記してください。

●規定部(自分の段・級で出品)

部門	段級位	用紙	書体・内容
字	初段以上	半紙	創作(書体自由)
漢	秀級以下	半紙	創作(楷書)
な	初段以上	半紙	創作
か	秀級以下	半紙	臨書
漢字条幅	初段以上	半切	創作(書体自由)
かな条幅	10級	半切	創作
ペン字	10級	半切	創作

・かな、かな条幅部門は料紙使用可。

●研究部(掲載課題の臨書)

部門	用紙	内容
漢字研究	半紙	文字数自由
かな研究	半紙	歌一首以上を書く、全文も可

・掲載部分以外の箇所は不可。
・かな研究部門は料紙使用可。
料紙貼りつけ可。

●自由部(段、級によらないもの)

部門	用紙	内容
前衛書	半紙	創作
現代書	半紙	創作
実用書	左記	書体自由

△実用書部門・出品規定▽

○用紙 半紙横 $\frac{1}{2}$ 24×16.5 cm、
B5コピー用紙 26×18.1 cm
も可。

○課題 掲載語句を書く。

○小筆、筆ペン、サインペンも可。

●特別研究部

・大作または小品のどちらかに1点出品する。

・詳細は出品票の掲載ページを参照のこと。

☆審査委員の部について

・「漢字部門初段以上」と「かな部門初段以上」に審査委員のみが出品できる部を設ける。

・バーコード出品券の段級欄に「審査会員」と記入する。

・通常の競書との重複出品は不可。

◎郵便物・清書・送金・一般事務等は

101-0031 東京都千代田区
東神田1-16-7
東神田プラザビル3階

公益財団法人 書道芸術院

電話(03)3862-1954

FAX(03)3862-1957

ご連絡等は
月曜日～金曜日 10時～16時の間に
お願いいたします。(土・日・祝日は休み)

送料

1か月の購読部数

1部～9部までの1回の郵送料

1部	79円
2部	95円
3部	103円
4部	119円
5部	135円
6部	151円
7部	167円
8部	183円
9部	199円
10部以上	送料免除

令和七年 八月二十五日印刷
令和七年 九月 一日発行

定価 1部 七五〇円

編集兼 下谷 洋子

発行人 株式会社 リンクス

印刷 小沢写真印刷株式会社

発行所 公益財団法人 書道芸術院

〒101-0031 東京都千代田区東神田1-16-7
東神田プラザビル3階

電話(03)3862-1195
FAX(03)3862-1195
振替 00150141350058

http://www.lincs.co.jp/shogi/